

まるこやま

第30号

平成27年3月20日

大東交流センターだより

発行：大東地区自治振興協議会 TEL(0854)43-2130

万感の思いをこめて

「さようなら旧大東中学校! そしてありがとう」

2頁に関連記事掲載



まるこやま広報 第30号発行によせて



平素は大東交流センターだより「まるこやま」の発行にあたり、各方面よりご理解とご協力をいただき誠にありがとうございます。

大東交流センターだよりは平成22年6月に第1号が発行され、今回で第30号を迎えることができました。これを記念し、本号は2頁増の8頁でお届けすることといたしました。

振り返ってみますと、本紙は大東交流センターがスタートしたことを機に創刊され、名称は「大東交流センターだより」とされていました。平成22年8月の2号より「まるこやま」の愛称がつき、今日に至っています。これは編集委員会の立ち上げによって、「タイトルは大東地区のシンボルである丸子山、皆さんが愛する丸子山にしよう」と名付けられました。地域の皆さんが心ひとつに絆が深まるようにとの思いが込められています。そして2ヶ月に一回、4頁構成で発行していましたが、平成25年9月の21号から6頁に紙面を増やしより多彩な記事が掲載できるように努めてまいりました。

これからも住んでいる地域の身近な話題や知りたい情報を皆様と共有できるよう心がけていきたいと思っております。大東交流センターだより「まるこやま」が大東地区の皆様にも愛され、地域の絆を深めることの一助になれば幸いです。

この事業が継続し第30号の記念号が発行できましたことを感謝いたします共に、今後とも皆様のご理解とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

さよなら旧大東中学校校舎



主要地方道松江木次線バイパス工事により順次解体が進められていました旧大東中学校校舎・円形体育館ですが、いよいよ最後の鉄筋校舎の解体工事が始まりました。

旧大東中学校は昭和23年11月に米子の大篠津兵舎を移転改築し、生徒数210人、教職員11人でスタートしました。昭和29年4月には大東、春殖、佐世、阿用中学校が名目統合し、生徒数1,262人の大東中学校が誕生しました。昭和30年1月には県内初の鉄筋3階建ての校舎が、翌年7月には珍しい鉄骨円形屋内体育館がそれぞれ完成しました。ピーク

時の生徒数は昭和37年度の1,465人で31クラスとマンモス校となりました。平成13年3月の閉校までに12,714人の卒業生が巣立っていきました。いよいよたくさんの思い出が詰まった旧大東中学校校舎が5月末には完全に更地になります。

「防災・減災」を確かなものにしていきましょう

昨今の集中豪雨や巨大地震、原子力災害などから防災の意識が高まると共に、隣近所の大切さ、「自助」「互助」の大切さが叫ばれています。当大東地区でも昨年4月の「大東地区自主防災連絡協議会」発足以来、各自治会では会長、防災委員が中心となって「自治会防災組織」の結成に向けた学習会や検討会が開催されてきました。そしてほとんどの自治会で組織の目的や事業、役員などを盛り込んだ規約が確認され、少しずつ自治会単位の自主防災組織が動き出しました。雲南市でも「避難行動要支援者の避難支援計画」が作成されるなど、身近な住民同士の関係を深め災害に備える取組が重要となってきているところです。実効性のある防災組織を構築するためにはまだまだ多くの課題解決や訓練が必要です。

その一環として、各自治会の防災活動をリードするみなさんを対象にした「地域防災の進め方」の勉強会を3月9日に開催しました。当日は山口大学大学院の瀧本浩一准教授をお招きして～個人、自主防災組織がおさえておくべき20のポイント～を分かりやすく講演いただきました。災害に対する「いつ？だれが？どこが？」のキーワードを地域のみんなですべて整理・共有することが大切とのこと。地域の危険箇所を現場で把握する「防災まち歩き」や地図を用いて防災対策を検討する「災害図上訓練」の重要性も話されました。



やっと始動し始めた自主防災活動です。個々にはなかなか出来ない災害に対する備えを地域のみんなと継続して取り組んでいきましょう。

かいあい募金

・大東町（上町） 安部 幸治 様（一般寄付） **ご寄付に感謝致します**

皆様からお寄せいただいたご寄付は地域の絆を深め、支えあう活動に対する補助金等に活用させていただきます。（事務局 TEL.43-2130）

これからを考える

『自立と生産』を合言葉に魅力ある地域に!

私たちは町政懇話会等で熱く論議をしながら「合併してサービスは高く、負担は軽く」の旗印の下、「合併やむなし」の結論を出し、平成16年11月に雲南市を誕生させました。こうした動きは全国的にも3,200あった市町村が1,700に減るなど「平成の大合併」ブームとなりました。

新市建設計画では財政難や人口減少などを想定し、効率的な行政サービスを確保するために、施設の統廃合や指定管理者制度、民間委託などを促進し、また、目玉の一つである「地域自主組織」を小学校単位に結成し、小規模で多機能な住民自治を目指すこととしています。

あれから10年、更に少子高齢化が進み、小学校統廃合や総合センター縮小などを目の当たりにするにつけ、ますます「住民と行政の協働によるまちづくり」が求められていると感じます。協働していくためには、わたしたち住民側も一人ひとりがまちづくりの主役であることを認識し、知恵を出し、汗をかき、それぞれの得意とする分野で力を出し合いながらお互いを支え合う気持ちが大切です。そうした住民活動の活動拠点である交流センターや自ら地域課題の解決を目指す「地域自主組織」のあり方が重要となってきます。

また一方、国が進める「人口減少克服・地方創生」政策などとともに、地方でも若者にとって魅力ある元気で豊かなまちづくりが本格化しています。少子高齢社会の最先端をいく島根県では島根発「日本一の田舎づくり計画」なども提案されています。私たちの地域でも人口の流出抑制及び流入促進、交流人口の拡大に向けた住みよい環境づくりが急務です。

これから更に私たちを取り巻く社会環境や日々の暮らしが大きく変わろうとしていますが、自分たちのこの住み慣れた地域に誇りと愛着をもち、家族や地域との絆を大切にしながら地域の発展に取り組んでいきましょう。

大東町へターンして1年

北町 菅谷 伸一郎

現在2歳の息子はお祭りが大好きです。去年の4月に大東町に家族3人で1ターンをし、その年に夏の大東七夕祭りに早速参加しました。自宅からゴールの赤川の土手まで、笹を持って練り歩いたり太鼓を叩かせてもらったり、最後はたくさんの花火を間近で見たりと、当時1歳8ヶ月の彼は終始大興奮でした。お隣のおじさんにいただいた大きいスイカの提灯は特別お気に入りです。

1月にある北町のとんど焼きでも、普段から家族でお世話になっている方に手を引かれて、雪の降るなか長い時間を息子が歩いている姿を見て、随分とたくましくなったんだなぁとビックリしました。

大東町で暮らし始めてまだ間もないですが、ご近所の方々が親切でとても助かっています。子どものことを可愛がっていただいていますし、歩いていてもよく声をかけて頂きます。また、自然が豊かで遊びに行けるところが近くにたくさんあります。出雲や松江の大きい町へ渋滞も無く車で行ける大東町は、便利なおえに田舎暮らしも満喫できる本当にいい所だと思います。

田舎暮らしに憧れている若い人達や良い環境で子育てをしたいと考えている方々に、「大東町はおすすめですよ!」と声を大にしたいと思います。

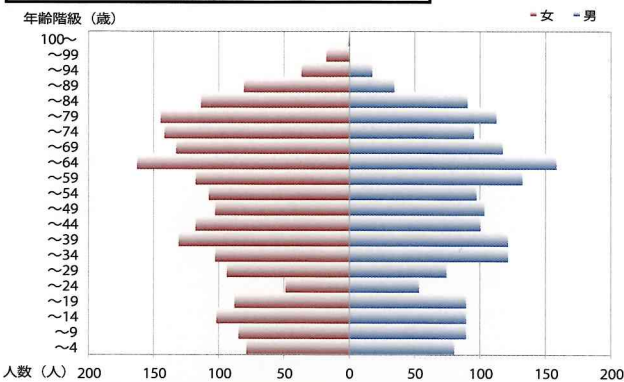
人口シミュレーション (雲南市・大東地区)

島根県作成「しまねの郷づくりカルテ」より転載
(ホームページで見れます)

現行推移モデル

過去5年間の人口増減の動きから単純に将来の地区の人口を推計したものです。

現在の人口ピラミッド(2010年)



人口増加シミュレーション

入力した組数が地区の外から移住、もしくは地区内から出ないと仮定して将来の人口を推計したものです。

必要定住組数数字を変えてみよう!

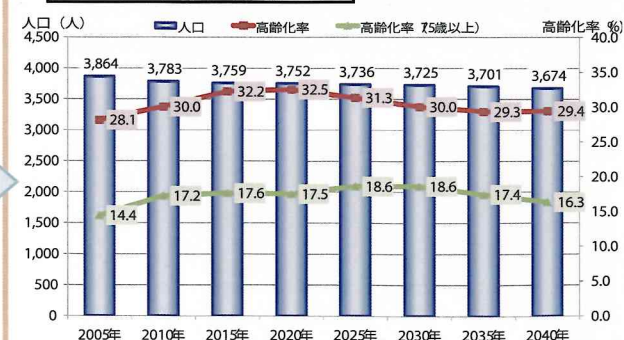
- ① 20歳代夫婦 組/年
- ② 30歳代夫婦 (子供連れ (1人)) 組/年
- ③ 60歳代夫婦 組/年

数字を変えると連動して下のグラフが変化するよ!

今後の人口予測



今後の人口予測



絆をつむぐ

あいあい募金活用事業報告 ＜＜新庄福祉大会21年目を迎えて＞＞

新庄社会福祉協議会 事務局 岩佐 倫男

第21回新庄福祉大会を2月15日新庄南公民館で開催しました。今回は「大東町の女性の集い」の皆様による、今社会問題化しつつある認知症をテーマにした、寸劇「徘徊しても安心なまちに」の公演、元大阪府立大学教授田中富士雄氏(大東町上町在住)によるふるさととの地名、神社・橋等の名称の由来についての『ふるさとばなし』を講演していただきました。両者ともに和やかな雰囲気のもと大会を盛り上げていただき、実りある大会とすることが出来ました。



新庄社会福祉協議会は平成6年、新庄地域の東・西・南の三自治会の福祉に関する総合的な推進を目的に設立され各自治会の皆様、福祉関係諸団体の協力を得ながら活動してまいりました。福祉大会は年度の締めくくりの行事として発足時より毎年欠かすことなく開催し、今回で21回目(21年目)となりました。

また、第19回大会より「大東地区振興あいあい募金」運営委員会より助言をいただき『あいあい募金活用事業』としての開催となっております。

今後も皆様の協力を得ながらより一層地域に密着した活動を行ってまいりたいと思います。

配食ボランティアを通して

配食ボランティア会員 土谷 文江

昨年、配食ボランティアをしてくれないかと声がかかり、私にも出来そうと思い引き受けました。週1～2回のペースで、今まで交流の無かった单身独居のお宅へ弁当を届けています。

「こんにちは、お弁当を届けにきました」返事が返ってくると一安心です。出来る限り「お変わりありませんか」と声をかけ、手渡ししながら短い時間ですがお話をして帰ります。

お留守のときは、弁当を所定の箱の中へ入れて帰ります。夏には保冷剤を箱の中へ入れておきます。玄関に鍵がかかっていたりすると、どうされたのか心配で、交流センターへ連絡をとり、みんなて対処しています。

雪が降っている時など、私のことを心配して玄関に出て送っていただくこともあります。ささやかな活動の中でお知り合いになれたことに感謝し、訪問時の笑顔を楽しみに今後も続けたいと思っています。

人は食べるのが一番の関心事です。「近くに店が無くて買物に困る」「作ることがとても大変だ」そういう方々にこのサービスを利用することで安心して暮らしていただければ幸いです。

今後も地域の人たちと共に、いろいろな立場で寄り添っていけたらよいと思っています。



メッセージが添えられる日もあります

大東高校の昔と創立百周年

大東高校八雲会 会長 安原 重隆

「勝田の森の奥深く♪」「須賀の小川の末くみて♪」大東高校・大東女学校の卒業生にとって懐かしい一節です。

大東高校は大正8年農学校として創立され、1学年40人弱でした。農学校時代の人たちは今健在なら100歳以上です。昭和4年女学校に変身しており、女学校も1学年40～60人でしたが、終りの方では120人位になっています。女学校時代の人たちは今83歳以上です。

昭和23年今の東大高等学校になり今日に至っていますが、私が在学中(昭和31～33年度)の校舎(木造)は現在全くありません。今第4棟が建っている所に講堂(体育館)があり、放課後はバレー、バスケ、柔道、卓球、雨の日は陸上部も、譲り合って(喧嘩し



鳥取県立大東高等学校

在りし日の講堂(体育館)

ながら)練習に励んでいました。

今春の卒業生は第67期生で、農学校以来の卒業生は合計13,206人です。卒業生には青春時代の無限で永遠の思い出があると思います。

3年後の平成30年10月創立百周年記念式典を行う予定で、いま記念事業へ向けて取組みをはじめようとしています。ご寄付のお願いも計画の中にあります。卒業生の皆様のご理解とご支援をお願いいたします。



女鹿田千紘さん(大東中2年)日本代表チームの勝利に貢献

女子ソフトボールU16日本代表の一員として台湾へ遠征していた女鹿田千紘さんは、1月19日～21日に行われた台湾の高校、中学との交流戦で、7試合中5試合に捕手、一塁手として出場し、打っては安打、犠打などで打点をあげ、日本チームの勝利に貢献する活躍を見せました。(日本代表の通算成績は6勝1敗)

女鹿田さんは帰国後、今回の台湾遠征では「自分を高める向上心を忘れない」、「感謝の心を持つ」、「学ぼうという素直な気持ち」、「自分に厳しく、人に優しく」など多くのことを学んだと話されていました。

一躍日本ソフトボール界の「期待の星」となった女鹿田さんの今後の活躍が期待されます。

大切な思い出を作りました

早稲田大学留学生 キャロライン

この一ヶ月の間に、たくさん大切な思い出を作りました。安部さんたちとホームステイした時、色々なところに行って、色々な文化のことを学びました。一緒に向かいのお寺に行って、お寺さんから仏教のこと説明していただきました。一緒にもちつきもしました。出雲大社に行って、大黒様のことや色々な神様の神話を聞きました。出雲にある灯台にも行って登って、上から海のきれいな景色も見えました。松江城に行って、お父さんとお母さんは色々なことを説明してくれました。ある夜、お母さんと一緒に「たかし」という演劇を見ました。それから、習字と銭太鼓を習うことができました。たくさんいい文化体験ができて、とても感謝しています。それから、いつも知らない単語を我慢して説明してくださったり、島根の文化を教えてくださいました。たこ焼きの作り方を教えてくださいました。毎日おいしい夕食を食べながら、面白くて、楽しい話ができました。日本語を勉強し始めた結果、大東のみなさんたちと色々な話ができてよかったです。大切な時間で、とても感謝の気持ちがあります。この一ヶ月を絶対に忘れられません。



「小さな親切」実行章を受章

1月28日に公益社団法人「小さな親切」運動山陰本部(古瀬誠代表)より「ハートフルロードボランティア大木原」(曾田昌吉会長)と「川西自治会」(浜田富次会長)に「小さな親切」実行章が贈呈されました。この実行章は身近な親切行為を表彰することによって、社会の中に思いやりの心を広めていこうというものです。「ハートフルロードボランティア大木原」は平成21年3月に発足し大木原自治会周辺の道路や河川の草刈清掃活動に取り組んでおられます。また、川西自治会は昭和57年の島根国体を契機に「花いっぱい運動」を展開し、地域を美しく・明るく・住みよくしようと長年続けておられます。

「できる親切はみんなでしよう。それが社会の習慣となるように！」がこの運動のスローガンです。小さな親切の輪を広げていきましょう。



大東国際交流事業30年を迎えて

この事業は昭和61年から始まった早稲田大学ジャパンスタデープログラムで留学してきたアメリカの学生を約一ヶ月間ホームステイしてもらう事業です。

今までに雲南市にきた学生数は約500名近く、ホストファミリーは約350軒を数えることとなりました。歴代の役員はもとより市民の皆さんのご理解の賜物であり、また町内各幼小中学校の先生方、行政の担当者の方にも感謝を申し上げます。

この間、幼小中の子どもたちはもとより、ホストファミリーを受けられたご家庭の皆様、またこの活動に関わってきた我々も、時には言葉の壁、衣食住の違

大東国際文化交流協会 会長 小山 繁樹

いなど文化の違いを理解した上での人と人との絆の素晴らしさを経験することで、小さな草の根の国際交流こそ平和への礎になると信じています。

益々複雑化する国際状況のなか、より多くの皆さんのご理解を頂きながら、この活動が雲南市へと広がることを期待しています。



まなびの泉



「ちゃれんじクラブ」(学童)と 預り保育(園児)



NPOほっと大東 理事長
小山 義弘

平成13年3月28日、NPO法人ほっと大東の「子どもの健全育成」分野の一環として「預り保育」を開始したのが始まりです。

当初は、同年1月、新庄南で開設したばかりの「デイサービスほっと」の1室を利用して、職員2名体制でスタートしました。高齢者との交流を目的の一つとして開始しましたが、子どもたちの元気の良さに圧倒され、デイサービスご利用の高齢者の皆さんの午睡時間などは、近所の路地や田んぼの畦道で遊んだりして、気を使いながらの毎日でした。そのうち大変有難いお話を頂くことができました。当時、合併前の大東町から、旧大東幼稚園舎を提供して「放課後児童対策事業」として業務委託するとの知らせでした。早速、同年6月1日から受託事業として再スタート、名称は「何事もあきらめず挑戦する人間に育って…」との強い願いが込められた『ちゃれんじクラブ』となりました。現在では、町内の5つの小学校の約100名の児童が利用しています。一方、幼稚園児の預り保育は新大東幼稚園舎の空き室を借用し、当法人の独自の事業として3つの幼稚園から約30名の園児が利用しています。

この間、行政、地域、保護者の皆様方のご理解とご協力のもと、お陰様で14年目を迎えることが出来ました。これからも子育ての不安や悩みなどを保護者の皆様とともに考え、一人ひとりの成長を喜びあい、安心して子育てが出来る支援をしていきたいと思ひます。

大東小3年 小山真由子さん、 5年 大塚成実さんが 全国表彰を受賞!

大東小学校3年生小山真由子さん(古城自治会)は、和傘が和紙でできていることに着目した「傘のけんきゅう」で、その研究テーマや実験方法のユニークさが評価され、全国児童才能コンテストの科学部門で最高賞となる文部科学大臣賞を受賞しました。

小山さんは、和傘が紙でできているのに雨が掛かっても何故破れないのか不思議に思い、和紙にえごま油・なたね油・柿渋・ローソク・防水スプレーなどをかけたり、その和紙に剣山を落として強度を比較する実験をしたそうです。

「実験は面白くて楽しかった、賞をもらったことにはびっくりしたけど嬉しかった」と話していました。

また、同じく5年生大塚成実さん(越戸自治会)は、青少年読書感想文全国コンクールの課題図書の一部(題名は「虫も私も自然の一部」・・・「カブトムシ山に帰る」)に応募し、素直で豊かな感性と表現の素晴らしさが評価され、全国各地から応募された449万編の中から第3席にあたる全国学校図書館協議会長賞を受賞しました。

こうした二人の受賞により大東小学校の平素の教育が評価され、それぞれ学校賞も併せて受賞しました。



大東小3年 小山真由子さん



大東小5年 大塚成実さん

最後に悔し涙を嬉し涙に変えて、甲子園へ!

大東高校2年 渡邊 奨斗

僕は去年の夏の戦いが終わり、新チームのキャプテンに指名され秋からキャプテンという立場でチームを引っ張っています。夏、惜しくも開星に敗れ、甲子園出場の夢は叶いませんでしたが、多くの方々に「感動した」「よくやった」などたくさんの言葉をかけてもらいました。夏の大会での先輩方の悔し涙は今でも忘れません。

その悔しさを胸に秘めて秋季大会に臨みました。夏の大会の印象も強く、周りからの期待もある中で戦いましたが、結果はベスト4をかけた戦いで浜南に1対8のスコア負けでした。負けた瞬間ベンチの中で頭が真っ白になり、ただ浜南の選手が喜んでいるのが耳に入ってくるのみでした。帰りのバスから降りて泣きながら悔しさをかみしめ走って高校のグラウンドへ。二年生で集まって「俺らにはもう夏しかない。絶対夏獲ろう」と自分たちの弱さと戦いながらミーティング

をしました。

そして冬季トレーニング。スコアボードに浜南戦のスコアをはり、練習前には目を閉じて浜南戦を思い出し、夏の甲子園出場、日本一を目標に毎日モチベーション高くみんなで練習してきました。その分、この冬で得たものは大きく、大きな自信となりました。

最後の夏に向けて苦しいことの方が多いと思ひます。しかし、最後に悔し涙を嬉し涙に変えるためにキャプテンとしてチームを引っ張っていこうと思ひます。そして今年の夏、大東高校史上初の甲子園出場、日本一を達成して、大東の地に感動を与えられるよう頑張ります。



おらが住んでる町

結婚を機に長野市に移り住み、長野市民になって43年経ちました。当初は知人友人もなく少々戸惑いもありましたが、今では多くの知人友人も出来、長野の土地柄にも馴染み、第二の故郷になりました。

犀川と千曲川に挟まれた中洲の南端に住んでいますが、この中洲一帯は武田信玄と上杉謙信が5回にわたり繰り広げた「川中島の戦い」の戦場となった所です。現在、主戦場跡地は「八幡原史跡公園」として整備されて、二人の一騎打ちのシーンを再現した銅像が建立され市民の憩いの場にもなっています。

長野市と言えば、冬期長野オリンピックが開催された事で知られています。他にも国宝善光寺、松代藩の武家屋敷、ちょっと足を延ばせば国宝松本城、上高地、避暑地で有名な軽井沢、多くのスキー場、温泉地等々、海こそありませんが四方を連なる高い山々に囲まれた風光明媚な地です。

特に今年は金沢延伸による北陸新幹線の開通、又、数えて七年に一度の善光寺御開帳の年でもあり、例年よりたくさんの参拝者や観光客が訪れる事でしょう。

生まれ育ち、多感な少年時代を過ごした大東は私の原点であり、忘れることのないたくさんの思い出の詰まった掛け替えない故郷です。毎年一度はお墓参りを兼ね帰郷しています。幼馴染みに会うのも楽しみの一つでもあります。



藤井 修二
(旧姓 小山)
66歳 西町出身



国宝に指定されている「善光寺」



川中島古戦場「八幡原史跡公園」

おらんちの自治会紹介

光自治会の生い立ち

昭和34年、連担地の東に位置する由緒ある稲村の地に、公営住宅として第一団地20戸が建設され、翌35年5月に自治会が誕生しました。元町長高橋英夫氏による「太陽は東から昇る。明るく光り輝け」との意味で『光自治会』と命名されました。以来、順次第二、第三団地と拡張され61戸の住宅団地が完成しました。当時は町営住宅ということで住人の入退居が繰り返される中、大東地区体協のすべての行事に参加することにより自治会員の団結も強まり、昭和45年からは大東七夕祭にも単独で参加したり、子供会、明寿会等々仲間作りの会が発足しました。更に昭和47年には住宅払い下げ運動を始め、町は県や国との検討を重ねられ、昭和53年度から逐次譲渡決定の通知を受け取りました。全戸が各自の持家となり定住化し、対外活動はもとより自治会内の活動が一段と活発になり、昭和56年にはコミュニティ推進地区の指定を受け、補助金事業として待望の公民館を新築することが出来ました。くしくもこの年の大東地区民運動会では総合優勝を果たし、

光自治会 福本 要

新築の公民館に於いて最高の祝杯をあげました。

年1回のふれあい活動の日はお年寄りから赤ちゃんまで集まり、文化祭、納涼祭、班対抗運動会、遠足、ゲーム大会等毎年色々な企画がされ、親睦と交流を深めていました。

その間に戸数20戸近くが減少し、自治会内活動や班活動に支障が始め、特別委員会により、班編成をし直し新たな体制でスタートしました。各戸、初代から二代目、三代目へと代替わりの時期でもあり、また、少子高齢化の傾向にはありますが、自治会内外行事には若い後継者の積極的な参加や、明寿会の花壇作り、宮掃除、年数回の懇親会や七代会、子供会、そば会、とんど会等、年間を通しての活動も継続しており、楽しみながら自治会を盛り上げ、更に“光り輝く光自治会”になる様、自治会員一同意を一つにしています。

祝光公民館竣工



郷土の暮らしと文化

モリブデンと三岸節子

上町 田中富士雄

2004年発行「新大東町誌」第9編「大東町の発展に尽くした人々」に元清久鉱山社長の吉田章義さん（1894～1980、愛知県出身）が載っています。昭和30年代のモリブデン鉱山が盛んな頃、吉田さんは洋画家の三岸節子と兄妹で、三岸節子の展覧会が大東中学校木造校舎であったと聞いた記憶があります。三岸節子（1905～1999）は女性洋画家の開拓者の一人で、1994年には女性洋画家として初めて文化功労者になっています。私生活では夭折した北海道出身の洋画家三岸好太郎（1903～1934）との結婚・死別など、その波乱の人生がモデル小説や伝記で広く知られています。節子の略歴をみると、「旧姓吉田、愛知県一宮市出身、織物工場を営む裕福な家が1920年倒産したのを機に画家を志す」とあります。吉田さんはどんな経緯で大東へ来られたのか、三岸節子とはどんな兄妹だったのか。

昨年10月名古屋方面へ出かける機会があり、破産した生家跡に建設されている三岸節子記念美術館を訪ねました。学芸員の方は吉田さんのことを知っておられ、昭和30年頃節子がパリから大東の吉田さんに送った手紙を見せてもらいました。吉田さんは吉田家の長男、節子は四女、美術館の隣の頓聴寺というお寺は三女の多喜さんの嫁ぎ先で、学芸員さんが連れていってくださり、多喜さんの息子で住職の鶴飼哲明さんから話を聞くことができました。鶴飼さんはモリブデン鉱山隆盛時の昭和34年頃と昭和55年の葬儀の時と大東へ来ておられます。

吉田さんは豪放磊落な人で、破産の後も色々な事業をするうち、名古屋で金融関係の仕事をしていた叔父から清久鉱山の鉱業権を継承し、大東へ来られたようです。両親が反対する中で画家を志す節子の初期からの良き理解者で、好太郎・節子のアトリエ建設など折にふれ援助をし、自分が生きている間に節子の美術館を建てると言っておられたそうです。昭和32年発行の若槻福義著「新島根の群像」の吉田章義論にも、吉田さんの美術館建設の構想が述べられています。それは、大東町の自宅に近い赤川畔の小丘に、二千万円を投じて美術館を開館する計画で、当初は故三岸好太郎、節子、黄太（長男、洋画家）の親子三画伯の作品と吉田さんの愛蔵品を陳列し、最終的には五億円を投じて西洋の名画も集めた日本でも屈指の美術館にするというものです。この構想は実現しなかったのですが、現在、北海道立三岸好太郎美術館（札幌）及び一宮市三岸節子記念美術館として、美術館は実現しています。

ところで、町内の年配の方から「昔、雲南病院に三岸節子の絵が掛けてあった」と聞きましたが、その絵はどうなったのでしょうか。



三岸節子記念美術館（一宮市）

この人に聞く

東町
難波キクエさん

俳句とお酒と歌を愛する素敵な101歳、難波キクエさんにお話を伺いました。

★元気の秘訣は★

「夕飯の時にお酒を毎日飲む。それが楽しみですけん。もっと飲みたいけど一杯だけ。それが元気のもと。」

★俳句を始めて40年★

難波さんが俳句を始められたのは、お世話になっていた方からもらったサフランの種がきっかけでした。もらった数日後にその方が亡くなられて、それから一年後に咲いた花を見て詠んだ句、「サフランが 形見の花に ならうとは」これが句会が一番評判が良かったそう。俳句を始めた当初から評判が高かったという難波さんの句は、多くの評価を得て賞をもらえることもしばしばあるそうです。

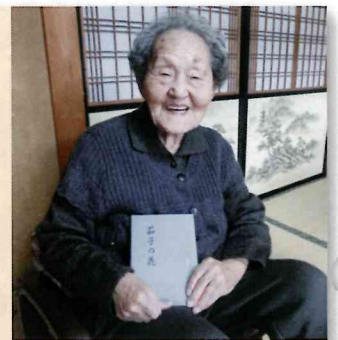
「元朝や 歩けぬ足に 足袋はかす」

「ほろほると あられのごとく 梅の花」

「ボンポリも 己も傾く 花に酔ひ」

元旦の朝のきりっとした空気が伝わってくる句や、梅や桜のある情景が鮮やかに浮かんでくる句など、難波さんの詠まれる作品は、俳句をよく知らなくても「すごい」が伝わってきます。俳句作りのコツを伺うと、「ぱっとひらめくんですわ。」とのこと。流石です。

花がお好きということで、庭に咲いたご自慢の紅梅を見せていただき、歌もお好きということで「黒田節」を披露していただきました。好きなものがたくさんあって、毎日を楽しみながら過ごされている難波さんは、とても魅力的で可愛らしい方でした。



言葉集
日記

- ◆今年の冬は雪が少なかったものの、寒い日が続きました。待ち遠しかった春の訪れに心が弾みます。
- ◆今回の「まるこやま」は30号を記念して、8頁でお届けいたしました。皆様にご寄稿いただき、にぎやかな紙面となりました。
- ◆これからも皆様へ愛される「まるこやま」を目指します。ご意見ご感想をお寄せください。